

出エジプト記38-40章 「全うする奉仕」

1A 用具の完成 38

1B 外庭 1-20

1C 祭壇 1-7

2C 洗盤 8

3C 掛け幕 9-20

2B 幕屋の記録 21-31

2A 作業の完了 39

1B 祭服 1-31

1C エポデと肩当て 1-7

2C 胸当て 8-21

3C 青服と長服 22-29

4C 記章の札 30-31

2B 祝福 32-43

3A 幕屋の組み立て 40

1B 設営 1-8

2B 油注ぎ 9-15

3B 命令の実行 16-33

4B 満ちる栄光の雲 34-38

本文

それでは出エジプト記 38 章から読みます。私たちはついに、最後に入っていきます。主が、シナイ山にて、お見せになっていた幕屋の型を、今は、知恵の御霊に満たして二人の職人と、またその指導の下で動く、技能を持った人々に奉仕をさせています。私たちはその初めの部分、36 章と 37 章を見ました。そこには、幕を造る作業、そして至聖所や聖所に置かれる祭具について書かれていました。続けて見ていきますが、聖所の外、外庭にあるものから始まります。

1A 用具の完成 38

1B 外庭 1-20

1C 祭壇 1-7

1 また彼は、アカシヤ材で全焼のささげ物の祭壇を造った。長さ五キュビト、幅五キュビトの正方形で、高さは三キュビトであった。2 その四隅の上に角を作った。その角は祭壇から出ているようになっていた。彼は祭壇に青銅をかぶせた。

外庭にある中心的な用具は祭壇です。ここが、もっとも盛んに活動が行われるところで、火によるいけにえを行うところです。聖所の金と異なり、外庭にあるものの材料の多くが青銅です。そして、これが祭壇の外形です。四隅の角は、いけにえとなる牛や雄羊の姿を表し、救いや力を表しています。「彼」というのは、ユダ族のベツアルエルのことです。

3 彼は、祭壇のすべての用具、すなわち、壺、十能、鉢、肉刺し、火皿を作った。そのすべての用具を青銅で作った。4 祭壇のために、その下の方、すなわち、祭壇の張り出した部分の下に、祭壇の高さの半ばに達する青銅の網細工の格子を作った。5 四個の環を鑄造して、青銅の格子の四隅で棒を通すところとした。6 彼はアカシヤ材で棒を作り、それらに青銅をかぶせた。7 その棒を祭壇の両側にある環に通して、それを担ぐようにした。祭壇は、板で、中が空洞になるように作った。

内部は、火によるいけにえ、つまりバーベキューをするのと同じような構造になっています。そして、幕屋の用具はそれに触れることなく運ぶので、棒が刺さっていてそれでレビ人が運搬します。

2C 洗盤 8

8 また、青銅で洗盤を、また青銅でその台を作った。会見の天幕の入り口で務めをした女たちの鏡で、それを作った。

洗盤は、祭壇と聖所の間にご置きます。祭司が聖所に入るときに、また青銅の祭壇で奉仕をするときに、手と足を洗うところです。そして、ここの青銅は、会見の天幕の入り口で務めをしている女たちの使っていた銅を使っています。古代の鏡は、エジプトでもまた中国や日本においても銅でした。会見の天幕の入り口にいた女たちは、祭司の手足の洗いのために、自らを美しく飾るのに大切な道具を捧げたのです。私たちは、「犠牲」が伴うところに祝福があることを知らなければいけません。と同時に、犠牲というのは極めて自発的なもの、神と本人との間でしか行うことのできない個人的なものです。

3C 掛け幕 9-20

9 彼はまた、庭を造った。南側では、庭の掛け幕は撚り糸で織った百キュビトの亜麻布でできていた。10 柱は二十本、その台座は二十個で青銅、柱の鉤と頭つなぎは銀であった。11 北側も百キュビトで、柱は二十本、台座は二十個で青銅、その柱の鉤と頭つなぎは銀であった。12 西側には五十キュビトの掛け幕があり、柱は十本、その台座は十個、その柱の鉤と頭つなぎは銀であった。13 正面の東側も五十キュビト。

外庭は、掛け幕をかけることによって造ります。南北が百キュビト、東西が五十キュビトの長方形ですが、東から人々がいけにえを携え、そこに入口があります。

14 門の片側には、十五キュビトの掛け幕と、柱が三本、台座が三個あった。15 庭の門の両側をなすもう一方の側にも十五キュビトの掛け幕があり、柱は三本、台座は三個であった。16 庭の周囲の掛け幕はみな、撚り糸で織った亜麻布でできていた。17 柱のための台座は青銅で、柱の鉤と頭つなぎは銀、柱頭のかぶせ物も銀であった。それで庭の柱はみな、銀の頭つなぎでつながり合わされていた。18 庭の門の垂れ幕は、刺繍を施したもので、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布でできていた。長さは二十キュビト、高さ、あるいは幅は五キュビトで、庭の掛け幕に対応していた。19 その柱は四本、その台座は四個で青銅であった。その鉤は銀であり、柱頭のかぶせ物と頭つなぎは銀であった。20 ただし、幕屋とその周りの庭の杭は、みな青銅であった。

掛け幕が亜麻布の白が基調であるのに対して、門の幕は聖所の幕と同じ作りになっています。イスラエル人に対して、主の栄光をここで垣間見ることができるようにしてあります。イエスご自身の姿を表していますね、この方は聖いことが白から分かりますが、その門には、ご自身の犠牲、つまり流された血、着せられた紫の衣、そして天に引き上げられましたが、それを表す青です。このことを思いながら、いけにえを携え、幕屋の中に入ることができます。

2B 幕屋の記録 21-31

21 幕屋、すなわち、あかしの幕屋の記録は次のとおりである。これはモーセの命によって記録されたもので、祭司アロンの子イタマルのもとでレビ人が奉仕したことであった。22 ユダ部族に属する、フルの子ウリの子ベツアルエルは、【主】がモーセに命じられたことをことごとく行った。23 彼とともに、ダン部族の、アヒサマクの子オホリアブがいた。オホリアブは、彫刻をする者、意匠を凝らす者、また青、紫、緋色の撚り糸と亜麻布で刺繍をする者であった。

一通り、幕屋のものがすべて完成した後で、その記録を残しました。後にレビ人がこれらの幕屋を持ち運ぶ奉仕を行います、彼らが記録を行います。そしてアロンの子で祭司のイタマルがそれを指揮しました。そして次に、これら用具に用いられた金属の重さを計算しています。

そして、ここに「ベツアルエルは、【主】がモーセに命じられたことをことごとく行った。」とあります。これから、この言葉が何度となくでてきます。主にあって忠実であるというのは、こういうことです。主が言われたということだけで、それを行う姿であり、それが奉仕の姿です。ベツアルエルは、この時点で、自分にまかされていた用具のすべてを造ったのです。

24 聖所の設営のすべてにおいて、その仕事のために用いられた金、すなわち奉獻物の金の総計は、聖所のシェケルで二十九タラント七百三十シェケルであった。25 登録された会衆による銀は、聖所のシェケルで百タラント千七百七十五シェケルであった。26 二十歳以上で登録された者が全部で六十万三千五百五十人だったので、これは一人当たり一ペカ、聖所のシェケルで半シェ

ケルである。27 聖所の台座と垂れ幕の台座を鑄造するのに用いた銀は百タラントで、百個の台座に百タラント用いた。一タラントで一個の台座である。28 また、千七百七十五シェケルで柱の鉤を作り、柱の頭にかぶせ、頭つなぎで柱をつないだ。29 奉献物の青銅は七十タラント二千四百シェケルであった。30 これを用いて、彼は会見の天幕の入り口の台座、青銅の祭壇と、それに付属する青銅の格子、および祭壇のすべての用具、31 また、庭の周りの台座、庭の門の台座、幕屋のすべての杭、庭の周りのすべての杭を作った。

金は、計算すると 994.322 キロです。ほぼ一トンですね。

そして、イスラエル人の成年男子は、人口調査を受けて、一人ひとりが銀半シェケルを償い金としなければいけませんでした(30:13)。これを計算すると、3420.235 キロです。今、20 歳以上の成年男子が 60 万 3550 人いて、それぞれの償い金半シェケルでかけると、きっかり 3420.235 キロになります！！つまり、イタマルは銀を過不足なく用いたということです。幕屋そのものが、すべてのイスラエル人の捧げ物でなりたっていることを象徴しています。償い金は、彼らが代価をもって救われたことを意味しています。そういった救われた者たちによって、幕屋が成り立っているということです。私たちはこのような健全な所有意識を持つべきです。「ここが自分の教会なのだ」という意識です。もちろん教会の頭はキリストであり、教会の所有者は神ご自身です。けれども、自分がその体に組み込まれているという強い意識が、具体的に自分の時間や労力、財力を捧げるときに芽生えます。

そして、青銅は 2407.36 キロです。

2A 作業の完了 39

1B 祭服 1-31

そして残りは、祭司の装束のみとなりました。

1C エポデと肩当て 1-7

1 彼らは、青、紫、緋色の撚り糸で、聖所で務めを行うための式服を作った。また、【主】がモーセに命じられたとおりに、アロンの聖なる装束を作った。2 金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて、エポデを作った。3 彼らは金の板を打ち延ばして金箔を作り、これを切って糸とし、青、紫、緋色の撚り糸に撚り込み、それぞれ亜麻布の中に意匠を凝らして織り込んだ。4 エポデに付ける肩当てが作られ、それぞれがエポデの両端に結ばれた。5 エポデの上に来るあや織りの帯はエポデと同じ作りで、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、エポデの一部となるようにした。【主】がモーセに命じられたとおりでである。6 彼らは縞めのを金縁の細工の中にはめ込んだ。それには、イスラエルの息子たちの名が、印章を彫るように刻まれていた。7 彼らはそれらをエポデの肩当てに付け、イスラエルの息子たちが覚えられ

るための石とした。【主】がモーセに命じられたとおりである。

装束であります、エポデと肩当てを作っている姿が描かれています。ここで、これまでの主語が「彼」であったのが、ここから「彼ら」に変わっています。これは、ベツアルエルの奉仕は終え、オホリアブとその指揮下にいる者たちが行っているからです。「彼」という主語に戻る時は、ベツアルエルの技能が必要な時になります。

祭司の装束の中で中心になっているのが、両面エプロンのようになっているようなエポデです。幕屋の幕と同じ撚り糸が使われていますが、加えて金色の色も織り込まれます。これがすごい作業でした、金の板を打ち延ばして糸にして織り込んでいます。

2C 胸当て 8-21

8 また、意匠を凝らして、エポデの細工と同じように、金色、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて、胸当てを作った。9 正方形で二重にしてその胸当てを作った。長さは一ゼレト、幅一ゼレトで、二重であった。10 その中に四列の宝石をはめ込んだ。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。11 第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。12 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。13 第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれた。14 これらの宝石はイスラエルの息子たちの名にちなむもので、彼らの名にしたがい十二個であった。それらは印章のように、それぞれに名が彫られ、十二部族を表した。

胸当てを作りました。それはポケットのようになっていて、中にウリムとトンミムを入れます。そして胸当てには、イスラエル十二部族を代表する宝石をはめ込んでいます。

15 また、胸当てのために、撚ったひものような鎖を純金で作った。16 彼らは金縁の細工二個と金の環二個を作り、二個の環を胸当ての両端に付けた。17 胸当ての両端の二個の環には、二本の金のひもを付けた。18 その二本のひものもう一方の端を、先の二つの金縁の細工と結び、エポデの肩当ての前側に付けた。19 さらに二個の金の環を作り、それらを胸当ての両端に、エポデに接する胸当ての内側の縁に付けた。20 また、さらに二個の金の環を作り、これをエポデの二つの肩当ての下端の前に、エポデのあや織りの帯の上部の継ぎ目に、向かい合うように付けた。21 胸当ては、その環からエポデの環に青ひもで結び付け、エポデのあや織りの帯の上にあるようにし、胸当てがエポデから外れないようにした。【主】がモーセに命じられたとおりである。

胸当てがずれ落ちないように、エポデにしっかりと固定するための鎖です。

3C 青服と長服 22-29

22 また、エポデの下に着る青服を、織物の技法を凝らして青色の撚り糸だけで作った。23 青服

の首の穴はその真ん中にあり、よろいの襟のようで、ほころびないようにその周りに縁を付けた。24 青服の裾の上に、青、紫、緋色の撚り糸で撚ったざくろを作った。25 また彼らは純金の鈴を作り、その鈴を青服の裾周りの、ざくろとざくろとの間に付けた。26 すなわち、務めを行うための青服の裾周りには、鈴、ざくろ、鈴、ざくろとなるようにした。【主】がモーセに命じられたとおりである。

エポデの下には青服を着ています。すそに鈴と、糸のざくろ状の塊が交互についています。

27 彼らはアロンとその子らのために、織物の技法を凝らして、亜麻布の長服を、28 亜麻布のかぶり物、亜麻布の美しいターバン、そして撚り糸で織った亜麻布のももひきを作った。29 また、撚り糸で織った亜麻布と、青、紫、緋色の撚り糸を用い、刺繍を施して飾り帯を作った。【主】がモーセに命じられたとおりである。

青服の下に着る亜麻布の長服です。そしてももひきも身に付けます。さらに、頭にはターバンをかぶりますが、それも亜麻布で作りました。そしてアロンの子らは、この亜麻布の服だけとなります。そして、腰に締める飾り帯は、大祭司アロンのエポデの上から閉めます。

4C 記章の札 30-31

30 また、聖別の記章の札を純金で作し、その上に印章を彫るように「【主】の聖なるもの」という文字を記した。31 これに青ひもを付け、それを、かぶり物に上の方から結び付けた。【主】がモーセに命じられたとおりである。

被り物、ターバンのところに、記章の札を付けます。「主の聖なるもの」と書きつけます。

2B 祝福 32-43

32 こうして、会見の天幕である幕屋のすべての奉仕が終わった。イスラエルの子らは、すべて【主】がモーセに命じられたとおりに行い、そのようにした。33 彼らは幕屋をモーセのところに運んで来た。天幕とそのすべての備品、留め金、板、横木、柱、台座、34 赤くなめした雄羊の皮の覆い、じゅごんの皮の覆い、仕切りの垂れ幕、35 あかしの箱と、その棒、「宥めの蓋」、36 机と、そのすべての備品、臨在のパン、37 きよい燭台と、そのともしび皿、すなわち一列に並べるともしび皿、そのすべての道具、ともしび用の油、38 金の祭壇、注ぎの油、香り高い香、そして天幕の入り口の垂れ幕、39 青銅の祭壇と、それに付属する青銅の格子、その棒、そのすべての用具、洗盤とその台、40 庭の掛け幕と、その柱、その台座、庭の門のための垂れ幕と、そのひも、その杭、会見の天幕の幕屋の奉仕に用いるすべての用具、41 聖所で務めを行うための式服、すなわち、祭司アロンの聖なる装束と、祭司として仕える彼の子らの装束である。42 イスラエルの子らは、すべて【主】がモーセに命じられたとおりに、そのとおりに、すべての奉仕を行った。43 モーセ

がすべての仕事を見ると、彼らは、見よ、【主】が命じられたとおりに行っていた。そこでモーセは彼らを祝福した。

すばらしいですね、何度も「すべて【主】がモーセに命じられたとおりに行い」とあり、そして最後に「モーセが彼らを祝福した」とあります。この連続です。思い出せば、この言い回しは、主がモーセとアロンに対して、ファラオのところに行って、「わたしの民を出て行かせよ」と命じられた時に、使われた言い回しです。「7:6 そこでモーセとアロンはそのように行った。【主】が彼らに命じられたとおりに行った。」モーセは、それまでは自分ができないということでも右往左往していました。主は、「わたし主である」とし、ご自身が行われることであり、ご自身の栄光が現れるためであると迫りました。それでモーセは降参して、主の命じられるとおりに行っていったのです。ファラオは相変わらず強情でしたが、それでも着実に主の働きが前進しました。

このように、主の命じられることを一部、ではなく、すべて行ないます。一部行なって、不従順の罪で罰せられた人がいますね、サウルです。アマレク人を聖絶しませんでした。ですから、命じられたことを従うというのは、自分が何をするのかしないのか選ぶのではなく、すべて主の決められることです。そうやって初めて、奉仕も成り立ちます。

そうすると、主が私たちのその務めを祝福してくださいます。私たちは喜んで、自分の労力を捧げれば捧げるほど、主がその労苦を顧みてくださり、大きな霊的祝福を受けます。もちろん私たちは、何もしなくても、キリストにある霊的祝福にあずかっています。けれども、それを受けた者たちの心は変えられて、自ら進んで主におささげしたいと願うようになるのです。そしてその応答をも主が豊かに祝福してください、私たちは霊的に神との交わりを深めることができます。

3A 幕屋の組み立て 40

そして最後の章、40 章です。主は最後の幕屋の組み立てをモーセ一人で行うように命じられます。すべては準備されました。後は、それを組み立てるだけです。

1B 設営 1-8

1 【主】はモーセに告げられた。2 「第一の月の一日に、あなたは会見の天幕である幕屋を設営しなければならない。

記念すべき日に幕屋が完成します。第一の月の第一日とありますが、17 節を見ると第二年目の話です。イスラエルがエジプトを脱出したのは、第一の月の十四日の過越の日ですが、ほぼ一年後です。シナイの荒野に入ったのが第三の新月とありますので、シナイ山の地域に入るまでが 2 か月弱、シナイ山の麓に十か月いたこととなります。モーセがシナイの山で、二度に渡って律法を受けました。その間に金の子牛事件もありました。そして仕事に取り掛かって、かなりの時間をか

けて完成させたことでしょう。

3 あなたはその中にあかしの箱を置き、垂れ幕で箱の前をさえぎる。4 机を運び入れて備品を並べ、燭台を運び入れて、そのともしび皿を載せる。5 香のための金の祭壇をあかしの箱の前に置き、垂れ幕を幕屋の入り口に掛ける。6 会見の天幕である幕屋の入り口の前には、全焼のささげ物の祭壇を据え、7 会見の天幕と祭壇との間に洗盤を据えて、これに水を入れる。8 周りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛ける。

あかしの箱から始まり、すぐに垂れ幕ではこの前を遮ります。これは、あかしの箱が誰の目にも見えないようにするためです。それから、机と燭台を運び入れます。香壇も運び入れて、幕屋の入口の幕をかけます。それから外庭に行きます。祭壇と洗盤です。そして周りの外庭の掛け幕、また外庭の入口の垂れ幕を掛けます。

2B 油注ぎ 9-15

9 あなたは注ぎの油を取って、幕屋とその中にあるすべてのものの油注ぎを行い、それと、そのすべての用具を聖別する。それは聖なるものとなる。10 全焼のささげ物の祭壇とそのすべての用具の油注ぎを行い、その祭壇を聖別する。祭壇は最も聖なるものとなる。11 洗盤とその台の油注ぎを行い、これを聖別する。12 また、あなたはアロンとその子らを会見の天幕の入り口に近づかせ、水で洗い、13 アロンに聖なる装束を着せ、油注ぎを行って彼を聖別し、祭司としてわたしに仕えさせる。14 また彼の子らを近づかせ、これに長服を着せる。15 彼らの父に油注ぎをしたように、彼らにも油注ぎをし、祭司としてわたしに仕えさせる。彼らが油注がれることは、彼らの代々にわたる永遠の祭司職のためである。」

注ぎの油を、今、設営したすべてのところに注いで、また祭司の上にも注ぎます。これが、「聖別」「聖なるもの」とするために必要なことです。主に対して仕えるということは、その人が世にあるものから別たれていないといけません。世に属しているのではなく、神のものになっていないといけません。世にあるものから別たれて、神のものになることが「聖別」と呼びます。そのために油を注ぎます。あたかも、それが外界との直接の接触を防ぐがごとく、全てに注がれます。実際の油注ぎは、レビ記 8 章の任命式でみることができます。

これが、私たちキリスト者が、この世から別たれて、聖なる者とされて、主の前に出ていくのを目で見える形になっているともいえるのです。この油注ぎは、具体的には聖霊によって新しく生まれ、神のものとしてされたことを意味します。これがなければ、どんなにキリスト者らしくふるまっても、結局、世に属している者であり、それはイスカリオテのユダのようなものなのです。イエス様が弟子たちの足を洗われた時に、「皆がきよいわけではありません。」と言われました(ヨハ 13:10)。ヨハネは、教会から人々が出ていった時に、こう言っています。「 I ヨハ 2:19-20 彼らは私たちの中から出て

行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためだったのです。あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」

3B 命令の実行 16-33

16 モーセは、すべて【主】が彼に命じられたとおりに行い、そのようにした。17 第二年の第一の月、その月の一日に幕屋は設営された。18 モーセは幕屋を設営した。まず、その台座を据え、その板を立て、その横木を通し、その柱を立て、19 幕屋の上に天幕を広げ、その上に天幕の覆いを掛けた。【主】がモーセに命じられたとおりでである。

モーセは、主に命じられたその日に、設営を初め、終えたようです。主の命じられたとおりにすべて行なったことが強調されています。初めに、幕屋の骨格になる板を立て、幕を広げました。

20 また、さとの板を取って箱に納め、棒を箱に付け、「宥めの蓋」を箱の上に置き、21 箱を幕屋の中に入れ、仕切りの垂れ幕を掛け、あかしの箱の前をさえぎった。【主】がモーセに命じられたとおりでである。22 また、会見の天幕の中に、すなわち、幕屋の内部の北側、垂れ幕の外側に机を置いた。23 その上にパンを一行にして、【主】の前に並べた。【主】がモーセに命じられたとおりでである。24 会見の天幕の中、机の反対側、幕屋の内部の南側に燭台を置き、25 【主】の前にもしび皿を掲げた。【主】がモーセに命じられたとおりでである。26 それから、会見の天幕の中の垂れ幕の前に、金の祭壇を置き、27 その上で香り高い香をたいた。【主】がモーセに命じられたとおりでである。28 また、幕屋の入り口に垂れ幕を掛け、29 会見の天幕である幕屋の入り口に全焼のささげ物の祭壇を置き、その上に全焼のささげ物と穀物のささげ物を献げた。【主】がモーセに命じられたとおりでである。30 また、会見の天幕と祭壇との間に洗盤を置き、洗いのために、それに水を入れた。31 モーセとアロンとその子らは、それで手と足を洗った。32 会見の天幕に入るとき、また祭壇に近づくとき、彼らはずっと洗った。【主】がモーセに命じられたとおりでである。33 また、幕屋と祭壇の周りに庭を設け、庭の門に垂れ幕を掛けた。こうしてモーセはその仕事を終えた。

何度も何度も出てきたのが、「主がモーセに命じられたとおりでである」という言葉です。すると次の出来事が起こりました。

4B 満ちる栄光の雲 34-38

34 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。

これが出エジプト記のクライマックスです。栄光の雲が幕屋に満ちた、というのがクライマックス

です。出エジプト記において、主はご自分の栄光を初めにエジプトに災いを下されることによって、現されました。そして、主はシナイ山において、十戒を与えられるときにご自分の栄光をその山でお見せになりました。そして今、完成した幕屋においてご自分の栄光を見せられました。

すべてはモーセが主の命令に従った時に起こったことです。私たちが主の命令に従うときに、その後で見えてくるのは主の栄光なのです。「栄光」というのは、もともとの意味は「重さ」を表します。ちょうど天体の光を考えてください。引力の法則によって、そこに光が集められています。これから派生して、称賛や尊厳、富や力、これらのものが集まってくるのが栄光です。つまり、神の栄光の雲が満ちているというのは、神ご自身に注目が集まる、ということです。

私たちは、神中心の世界に入らなければいけません。今日、あまりにも人間中心の世界が広がっています。すべてが人間の権利、人間の主張、人間の論理を優先させて、本当の意味での人間性、つまり神にある人間、神の御心の中に住む人間を捨て去っています。神の栄光を見上げるからこそ、私たち人間は本来の姿に立ち戻ることができるのです。

ところで、モーセ自身でさえ、幕屋の中に入ることができないほど栄光の雲が満ちました。後にソロモンの時代にも、神殿が建てられた後に祭司たちがそこに入ろうとしても、栄光の雲で入ることができませんでした(1列王 8:10-11 参照)。神の栄光が輝くところには、どんな人間の営みも立ち入ることができません。私たちが天に入れば、人が何を行ったのか、どんなに優れているのかという賛辞は聞かれることはないでしょう。ただただ、神とキリストのすばらしさを賛美し、栄光をお返ししている姿しか見ることはできません。次回、レビ記に入りますが、そこは主が命じられている言葉のみがほとんどを占めています。主の栄光がはっきりと現れている書物です。

36 イスラエルの子らは、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。37 雲が上らないと、上る日まで旅立たなかった。38 旅路にある間、イスラエルの全家の前には、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があった。

この姿はレビ記の次、民数記で詳しく見ることができます。レビ記においては、続けて主がモーセと会見の天幕で話しておられる言葉が書き記されています。そして、シナイ山の麓から旅立つのは民数記に入ってからです。そして、旅をするのは、雲の柱の動きをみて行きます。そして夜は火の柱になります。主の栄光がいつも彼らの真ん中にあります。そして主のご臨在が彼らの真ん中にあります。金の子牛の時は、いっしょに行くことはないといわれた主が、やはり思い直して、いっしょに行ってくださいます。主の忍耐と憐れみを思わざるを得ません。